

令和3年度 自己評価・学校関係者評価報告書

令和3年3月25日

学校法人 田澤学園 東一の江幼稚園

1. 本園の教育目標

いつもにこにこ元気な子ども
思いやりのあるやさしい素直な子ども
伸び伸びと創造性の豊かな子ども

教育方針

1. 明るく健康な精神と元気な活力に満ちた心身の基礎を築く
2. 基本的な生活習慣と正しい社会的態度を育成し、豊かな情操を養う
3. 伸び伸びとした表現活動を通して創造性を養う
4. 自主・自発的な活動を促し、自立する心を養う
5. 毎日の遊びや活動の中で健全な心身を養う

2. 本年度重点的に取り組む目標・計画

(1) 自発的活動としての遊びが充実発展する環境構成

遊びの中の学びが充実する環境の充実を図る（環境構成の工夫と研修の充実）

(2) 幼児教育の重要性を伝える方法の拡充

主に保護者に「見えにくい教育」といわれる幼児教育や園での子どもたちの姿や成長を伝える方法を拡充し、理解と共有を図る。

（保育者のさらなる幼児教育の理解と保護者への発信の工夫）

(3) コロナ禍における表現教育の充実を図る

コロナ禍でも可能な表現活動ができる環境の工夫や指導のあり方を検討する。

（研修の充実と外部講師との連携方法）

3. 評価項目の達成及び取り組み状況

	評価項目	評価	取り組み状況
1	自発的活動としての遊びが充実発展する環境構成	A	<p>子どもの興味関心に応じた環境構成の充実のため、各教職員が工夫し、さらにその工夫をお互いで認め合い、また、参考にしあうようにしていた。</p> <p>環境構成は「して終わり」ではなく、子どもの姿に応じて再構成をすることが子どもの学びをさらに深くする。この意識を各保育者がもち、日々、環境構成、再構成について検討している。しかし、行事や他の仕事などもあり時間的余裕がないところに課題がある。</p> <p>これらに関する保育者の学びとしてオンラインで他園3園と合同での事例研修（年3回）と外部園参観（各4園）をし、オンラインで他園の事例を聞き、検討することや実際に参観で環境などを見ることができたことは、環境構成などの充実につながった。</p>
2	幼児教育の重要性を伝える方法の拡充	B	<p>本年より、「おうちえん」ドキュメンテーションを導入。徐々にその効果の実感が感じられるようになったが、今後より活用できるような工夫は必要である。たとえば、年度末アンケートで、「毎日のように見ている」が16%、「週に1回程度見ている」42.9%と半数の保護者が定期的に見ていたが、より見てもらえるような工夫などである。</p> <p>また、日常の中での保護者との会話や面談、園のブログ、保護者会など多様な方法で保護者や地域にその重要性を継続して伝えていった。</p>

3	コロナ禍における表現教育の充実を図る	A	<p>コロナ禍の中で、歌を歌う機会が減少したが、遊びの中でダンスをしたり、リズムを感じたり、楽器遊びをしたりと様々な音楽的な経験はできた。</p> <p>また、音楽の非常勤講師が子どもたちにピアノを聴かせてくれたり、保育者に日常的に音楽に楽しめるような指導をしたりした。</p> <p>音楽だけに限らず、なりきって遊べるような環境の工夫や、造って遊ぶコーナーの充実、工夫をすることも大切にしていた。</p>
---	--------------------	---	---

評価 (A…十分に成果があった B…成果があった C…少し成果があった D…成果がなかった)

4. 総合的な評価結果

評価	理由
A	<ul style="list-style-type: none"> コロナ禍であっても、子どもの遊びが充実するように環境構成や援助の工夫をそれぞれの教職員がしていた。 各教員の自己評価の中には <ul style="list-style-type: none"> 「子どもの興味に応じてスピード感を持って環境を用意する」 「遊び出しやすいような環境の工夫」 「遊びの応じて随時環境を変えていった」 「(掲示などで) 視覚的にもわかりやすいものを用意」 「研修で得た知識を積極的に活用」などの意見が見られた。 これらの工夫をした環境の中での子どもの育ちを保護者に伝えることが大切であるが、ドキュメンテーションを導入したことで伝える方法がより多様化することはできた。 さらに「伝える」という行為の中で、保育者の子ども理解がさらに深くなっていく傾向が見られるようになってきているので、単に「伝える」だけでなく、その効果が保育者自身の幼児理解や他にも多様に波及するように検討をしていきたい。 今年度は昨年同様、新型コロナウイルス感染症対策をしながらの保育となった。状況が変わる中、様々な検討、決断をした上での保育になったが、その中で、根源を大切にす保育を心がけた。 たとえば2月の「ありんぼ会表現展」では、1週間の休園期間があったが、行事は「生活に変化や潤いを与え」(幼稚園教育要領)るものであるという根源を考え、子どもたちの興味関心に応じた環境をその期間に準備し、そこから子どもたちが遊びながらアイデアが出てくるようにすることもできた。こういったことが来年度やアフターコロナ、ウィズコロナのなかの保育を見通すひとつのヒントにもなった。 保育者の学びの一つとして、コロナの影響もあり、オンライン研修が増えたことがあげられる。研修受講機会が増えたことが保育者としてはたいへん参考になったという意見もあった。 課題としては、ドキュメンテーションなどの導入はしたが、コロナ禍で保護者との対話が少なくなったことに保育者自身も不安を感じていた点や、保育の質の向上のため様々な取り組みや工夫をする中で仕事に関するタイムマネジメントには課題がある。

評価 (A…十分に成果があった B…成果があった C…少し成果があった D…成果がなかった)

5. 今後取り組む課題

	課題	具体的な取り組み方法
1	保育の質の向上と業務負担軽減	「保育分野の業務負担軽減・業務の再構築のためのガイドライン」(厚生労働省)などと参考にプロジェクトチームを立ち上げと取り組みの実践をしていく。
2	保育の質の向上を目指す「共有」	保育環境や「見える化」の工夫などが教職員間で共有出来るようにし、それぞれの保育者が参考にできるような取り組みをする。
3	保護者に「伝える」を活用した保育者の資質向上	単に子どもたちの様子を保護者に伝えるだけでなく、その中での子どもの学びなどをより深く保育者が理解できるようにドキュメンテーションなどを活用した保育者の資質向上を目指す取り組みをする

6.学校関係者評価委員会の評価

年度末の保護者アンケートでは、東一の江幼稚園の保育についての評価は5段階評定で、たいへんよい(62.2%)よい(33.6%)ふつう(3.4%)わるい(0.8%)たいへんわるい(0%)であり、「たいへんよい」、「よい」を併せて95.8%の好意的な評価をいただいている。

また、学校関係者評価委員からは、次のような意見があった。

- 保育室の環境など、以前よりも保育者の意図や工夫が分かるようになり、さらに充実してきていることがわかる。
- 環境構成を子どもと一緒に楽しんで考えていることが伝わってくる。
- 保育者が、保育のあり方や園の方針を理解し環境を構成しており、さらに子どもたちの姿から再構成をすることが保育者自身の手応えにつながっている。
- それぞれの保育室の環境とそのほかの場所とのつながりなどをより考慮すると良い
- ドキュメンテーションや保育参加でより保育が分かるようになった。
- ドキュメンテーションを保護者に伝えるだけでなく、例えば、環境のカタログ化や一定期間で再編集したドキュメンテーションをつくるなどして子どもを長期的視点で理解するなど、多様な活用も考えられる。
- 保育者がうれしい、楽しいと思うことが大事だからこそ、子どもと一緒に保育を創っていくという視点も大切である。
- 保護者同士がつながるような工夫を今後も考えてほしい。